

めて島田に結よしもがな、とよみたり、げに、春元の句に、名にゆふやげにも島田の柳髪といへる面影はべるとて、たどり、男の騎たる馬のえりにつきてゆくもあり、前に引たる貞享三年の婦人養草に、髪に島田兵庫などいふは、遊女のある所の名をかりていふとある説に符合す、又享保十九年板、菊岡沾涼が作、世事談^{五卷}、島田といふは、東海道島田宿の女つねに此髪の風を結ひける、それゆゑに此名ありといへり、按に寶永七年板、寛濶平家物語^{一卷}に、正保慶安の比、東海道の茶汲女の名高きをならべいふ所に、鈴下嶺のおふり、坂の下のお竹關の小万、桑名のおまゆんなどならべいへれば、島田にもさるものありて、髪の一風をゆひはやらし、もゑるべからず、なにもあれ、田舎の女がゆひはじめたる髪の風、二百年すたらす、天下翕然として島田なるは、女装中の一奇事なり、^略、寛文五年板、古今夷曲集に、大井川ながれをたて、住宿の島田たちにし髪もゆふ君友^{保友}、又元祿九年板、女重寶記^{按此書新古二板あり}、卷一に、髪の風をならべいふ所に、町風は京も田舎も島田かうがい髻の二いろ、上薦も下薦もいふ事、七八十年此方におよべりとあり、按に元祿九年より八十年前は寛永四年也、此比ひにはいまだ島田の名も圖も物にみえず、されど右に引たる寛文五年の保友が夷曲などを参考すれば、島田髻の起れるは、今よりおほかた二百年前なるべし、其風今に盛にして、錦殿蓬窓、島田ならざるなきは、いとくめでたき髪の風にぞありける、元祿の間には、大島田、やつし島田、しめつけ島田、なげ島田、など、皆状によるの名なり、此它にも、玉むすび、吹あげ、つり船、猶さまぐの髪の風はやりし事物に見えたれど、うるさければもらしつ、

〔歴世女裝考〕^四此圖は菱川師宣筆

天和三年江戸板の繪本にあり、なげ島田。としてはやりしはこれならんか、